

播磨灘広域共同調査（抄録）

（平成31年度漁場環境改善推進事業「赤潮被害防止対策技術の開発」）

吉田和貴・朝田健斗・廣澤晃・加藤慎治

近年、瀬戸内海東部海域では有害赤潮プランクトンによる漁業被害が生じている。赤潮による漁業被害を未然防止および軽減するためには、赤潮発生海域を網羅した広域的な調査を実施する必要がある。本課題では、瀬戸内海東部海域において、各機関が連携して広範な調査を実施し、有害赤潮プランクトンの発生状況および海洋環境を監視するとともに、既存データも含めたデータ解析によって当該海域における有害赤潮の発生シナリオを検証し、赤潮発生予察技術の精度向上を図る。併せて、これらの情報発信方法を検討することで漁業被害軽減に資することを目的とする。

平成31年度における徳島県担当海域（播磨灘南東部）における有害種等の出現数の推移等について取りまとめたので、その概要を報告する。なお、詳細については『平成31年度漁場環境改善推進事業「赤潮被害防止対策技術の開発」報告書』を参照されたい。

1. 夏季調査

Chattonella antiqua および *Chattonella marina* は期間中、低密度で推移した（図1）。

Karenia mikimotoi は7月下旬から増加がみられ、8月上

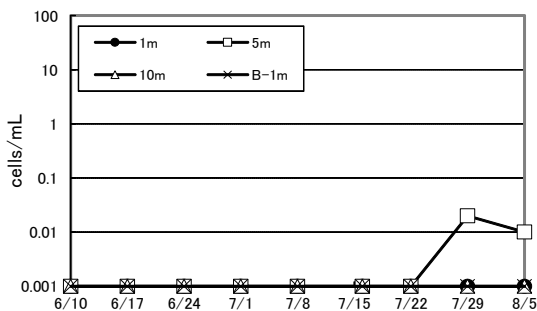


図1. *C. antiqua*及び*C. marinai*細胞数の推移

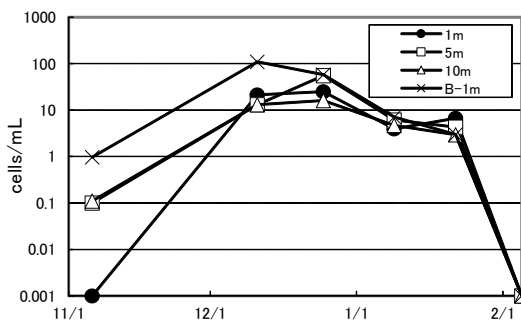


図3. *E. zodiacus*細胞数の推移

旬には50cells/mlを超えたが、その後減少し、9月上旬にはほとんどみられなくなった(図2)。

近年は、夏季の赤潮による漁業被害の件数が減少傾向にあるが、引き続きモニタリングを行い、漁業被害の防止や軽減に努めるとともに予察技術の精度を向上させる必要がある。

2. 冬季調査

ノリ、ワカメの色落ちの原因となる珪藻の*Eucampia zodiacus*が12月上旬に100cells/mlを超えて出現したが、1月以降は低密度で推移した（図3）。同じくノリ、ワカメ色落ちの原因となる珪藻の*Coscinodiscus wailesii*は期間中、低密度で推移した（図4）。DIN濃度については、11月は例年より低めであった。1月上旬には減少した。その後推移した。一時的にDIN濃度が2 μ M（ワカメの色落ちが発生する目安）を下回ることもあったが、ワカメの顕著な色落ちは報告されなかった。

近年は、栄養塩の減少に加え、ノリ、ワカメの色落ちの原因となる珪藻が増加し、色落ち被害が度々発生している。引き続きモニタリングを行うことでノリ、ワカメの色落ちの原因となる珪藻赤潮の発生メカニズムを把握し、予察技術の開発を目指す。

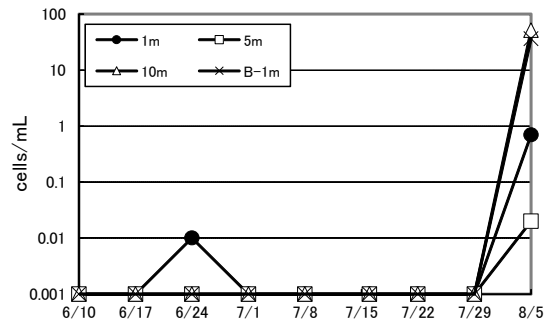


図2. *K. mikimotoi*細胞数の推移

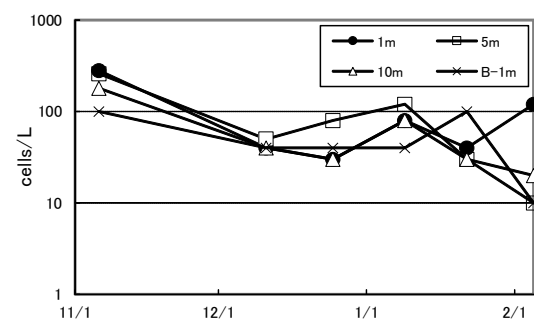


図4. *C. wailesii*細胞数の推移